

風のように

甘木教会



牧師：竹田孝一



主を求めよ、そして生きよ。

アモス5：6

イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」

マルコによる福音書10:27

【説教要旨】

「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物
を売り払い、貧しい人々に施しなさい。」というイエスさまの
お言葉を生き方を求めてきた富める青年に返した言葉を聞くと
びにこの青年ばかりでなく、私たちもとまどってしまいます。
フランチェスコやマザー・テレサのような特別な人はできて
普通の人である私たちにはできないと思いがちですが、イエ
スさまは特別な言葉を青年に私たちに言っているのでしょうか。

加藤常昭牧師はこの説教箇所を宗教改革者たちのことを語っ
ています。「宗教改革、マルティン・ルターやカルヴァンが起
しました宗教改革の時に、この聖書の言葉が再び光を放つよ
うになった。ルターもカルヴァンもこの箇所について喜んで書
きました。そしてふたりとも共通のことを言った。それまでの
ローマ教会はこの言葉をこういうふう理解していた。すべての
財産を施してイエスに従う、それは私たちにはできない。しか
しそれを実行できた人もいた。できた人は修道院に入り、ある
いは司祭さまになっている。私たちにはできない、できなくて
もいい。フランチェスコのように、あるいは自分の教会の司祭
さまのように、財産を捨てて神さまのために生きて、主イエス

の後について行く人、それは特別な人たちだ。だがルターもカルヴァンも言います、それは間違っていると。主イエス・キリストの恵みによって生かされる者は、すべてを捨てることができる。この世にあってすべてを捨てることができる。」

宗教改革者がこの箇所を、キリストの恵みに生きるということであると捉えたのです。恵みに生きる、ここに私たちを捉えていた「家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑」という財産から解放され自由にその振る舞いをできるのです。私たちが生きていくにあたり、どうしても財産、家族が必要になる。そしてこの財産にこだわってしまう。だから、わたしたちは「これだけしかないからこれだけしかできない」というふうに縮こまってしまふ。いつも私たちが生きていく時、私の内にある力、知識、地位、財産からしか判断できなくなっている。ここに縛られている。だから、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」という世界が分からなくなって、このみ言葉が分からないことが、私たちをしばり、不自由な世界を生きていくことになっているのではないのでしょうか。

ブラジルで、日葡聖書を作るとき、私は、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」という体験をしました。到底、人が量るなら日葡聖書を作る資金は日系教会にはありませんでした。弓場司祭は、ある早朝、アナホーザの私の教会のベルを「ブー」と何度も鳴らし、私を起こしたのです。「あれ、あれ、お前が言っていた、あれ」、「日葡聖書の制作ですか。」、「そう、それ、それ、作ろうと思う」、「へえ～、司祭はそんなものは出来ないと言っていたじゃないですか」、「人は日々変わる。朝祈っていたら、神さがやれと言った」という会話をアナホーザの礼拝堂でしたことを思い出します。結論は、「神には出来ないものはない。」ということでした。

なぜ、私たちは出来ないと結論づけるのでしょうか。「あなたに欠けているものが一つある。」、何が欠けているのでしょうか。

それは、信仰に生きる、イエス様に頼る、つまりイエスさまの愛の中に飛び込むということではないでしょうか。弓場司祭は「神は愛なり」ということを繰り返し語っていました。このイエスさまの愛に飛び込むことをさまたげるものは、財産であり、知識であり地位・・・であるのです。

だから、青年を神の愛によって生かすために「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。」と言われたのです。

ルターの死ぬ2日前の「我々は乞食である。それは真だ。」という有名な言葉があります。これは神の、イエスさまの愛、恵みだけを生きていこうとし、すべてを失っていく歓喜の言葉であると思うのです。この世のもろもろから、死からさえも自由にされるのです。

日葡聖書を作る時も、さかのぼれば、最初の門司教会での体験を通して、「教会が『精神薄弱児施設・光の子学園』建設以来、私は小さいから、力がないから出来ませんと言わないことにしている。小さいからこそ、神は奇蹟を起こしてくれると信じている。」という牧師生活を引退できるまで導かれ多くの奇蹟をいただきました。同時に今、自分の人生を振り返るとき、愛を信じきれなかったひねくれ者の私が神の、イエスさまの愛に飛び込まされた人生であったと思っています。

アモスは、「主を求めよ、そして生きよ。」と言います。私たちがこの世にあって、信仰者は、神、神の愛を求めて生きることであり、困難なことがあっても、「**主を求めていく**」ことが、生きる勇気、希望を持って歩まさせていただけます。

「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。」というみ言葉は、主を求めよ、そして生きる招きであり、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」と奇蹟を味わえるのです。このすばらしい招き、奇蹟の起こる世界に今日も私たちの人生があります。主も私たちの生涯を求めてくださっていることを最後まで忘れてはいけません。

日毎の糧

生涯しょうがいの日ひを正ただしく数かずえるように教おしえてください。
知ちえ恵こころある心こころを得えることが出来ますように。



詩篇90：12



ルターの言葉

モーセがあたかも死ぬ日や時とかという死期が告知されるように欲していると、理解されてはならない。

「生と死の講話」金子晴勇訳 知泉書館

安堵の気持ち

詩篇90篇は、ルターの「生と死の講話」として有名であり、何よりも葬儀のときに交読される詩篇として有名です。また、キリスト教歴史学者・石原兼先生が自分の死を意識し始めて枕辺に置いていたという逸話は、有名です。

長寿の日本にあって、まだ71歳の者が言うのは憚るのですが、しかし、70歳に引退して死ということを意識し始めました。「モーセがあたかも死ぬ日や時とかという死期が告知されるように欲していると、理解されてはならない。」とルターが言うように、いつ死ぬのかということが気になるのではなく、修道士たちが「覚えよ、汝、死すべき者である」と朝夕？唱えたように、この言葉が実感できるようになった。同時に今日を一生懸命生きようという気持ちが強くなっている。

死を意識する、「生涯しょうがいの日ひを正ただしく数かずえる」こと、同時に生きるということ意識することではないだろうか。そして生きることが楽しくなっている。一日が終わり、テレビを見ながら番組中ほとんど寝ているが、よくここまで来たと安堵の気持ちで一日が終わる。「たとえ明日が終わりであっても今日、リンゴの苗を植える」、これが生涯しょうがいの日ひを正ただしく数かずえることではないでしょうか。

祈り：神よ、死を意識しつつ、生を力いっぱい生かされていくように導いてください。アーメン。

牧師室の小窓からのぞいてみると



石破内閣がスタートをしつつある。彼がクリスチャンであることはあまり知られていない。彼の天敵、麻生元首相もクリスチャンある。前者はプロテスタント、後者はカトリック教会である。

「秋月記」（葉室麟 角川文庫）、小説だが政治家とはどういうものか面白く読んだ。石破内閣の支持率は、50%で出発だが私は支持率は、あまり気にしていない。国民に嫌われても何を国民のためにするかということではないだろうか。

「米を作るには懸命に努めるしかない。しかし、ひとが作った米を奪うのであれば努めることはいらぬ。そう思う怠け心がひとの物を力によって奪い取ろうとするのだ。わたしは以前、正しいことを行えば、藩もひとびとの暮らしもよくなるとおもっていた。しかし、あれも怠け心の一つだったな」、「皆が生きたために励むという大道を歩まねば、悪人を除いたからといって民百姓が豊かになるというものではない。正しいことさえ行えば、というのは、努めることから逃げ口上になる時があるのだ」。「正しいことさえ行えば」、これがプロテスタント、悪癖、イエスに帰らず、パリサイ人に帰る先祖帰りにならないようにプロテスタントの首相は心して欲しい。

園長・瞑想？迷走記

今も2園の運営、経営の立て直しをしている。目まぐるしく社会は変化していく中で、翻弄されている。特に少子化は、止めることのできないことで、11月から始まる2025年度入園希望をどれくらい集められるかにかかっている。

こういうとき、運営と経営に目が行き忘れがちになることは、子どものこと、教育・保育である。目まぐるしく変化する中で将来、時代がどうであっても子どもたちが強く、雄々しく歩めるにはどうするかということではないだろうか。真摯にこれに向き合うことが出来るのは、102条園の幼稚園ではないかと益々、思うようになっていく。

甘木通信

久留米から甘木までの一時間弱の電車の中は、読書か睡眠と決めている。今日は、「秋月記」という本を読んでいるとぐいぐいと惹き込まれて気づくと終点の甘木駅に着いていた。しかし、今は、ほとんどの人がスマホを見ている。時代とともに車中の風景も変わっていくのは不思議ではないが、どうしても私は本を読んでもしまう。車中の読書癖で今があるからである。



神学校での勉強に行き詰まり、神学校を辞めようと思った除夜の夜、一冊の薄い本を本棚から取ったのは、「歎異抄」。一晩中、動いている電車に飛び乗り、読み始めた。なんでこんな本をよりによって取ってしまったのかと思っていたが、どんどんと本に惹かれていく。「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。そのゆゑは、自余の行もはげみて仏に成るべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」という言葉に出会う。一瞬にして悩んでいることが馬鹿らしくなった。信仰に生きよとするとき、この言葉を支えとして今ある。こんな出会いがあるのが車中の読書だ。

(甘木日記)土)いつものように朝、日善幼稚園行く。時間がかかったが、入園説明会の日を間違ってきた家族が来られた。これは神の導きか。夜は甘木。温泉で癒し。日)最後の芝生10束を植え、終了。春は青々と願って。午後から久留米教会役員会で幼稚園報告。「秋月記」をいっきに読んでしまう。月)雨、昨日植えた菊の苗、芝生にとっては福音。ホッと。火)朝の通学生との朝の挨拶を交わすことから一日が始まる。爽やかはじめ。水)3日、お客の強い整髪の香りが鼻からとれずに耳鼻咽喉科に昼休み前に行く。老いるとはこういうことか。木)入園説明会第3回目、岡崎の友の会での説教を推敲し、見直す気分転換で木の剪定。金)運動会の練習。保育内容をめぐって遅くまで議論。先生を信用できるからだが。

おまじ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。

ぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）いつものように日善幼稚園に掃除に行く。庭の花の手入れ、木の剪定をしていると、玄関で騒ぐ声、慌てて、門まで行く。「今日は幼稚園じゃないの。お姉ちゃんたちの運動会だよ。」とお母さん。「e君、おはよう。いってらっしゃい」。教会の方が掃除に来られる。「今日は花がこちらを見て、笑っていますね」、やっと花たちにとっても過ごしやすくなった。主任の車が駐車場に。「そうか、今年の春まで日吉小学校の特別支援の先生だった。今日は運動会、気になって生徒を見に来たのだろう」、そう思って仕事をしていると声がする。rちゃんとおじいさん。「昨日、作った木戸が気になりました」と。次は入園説明会の日を間違えて来た親子。園を見学していただき説明をする。昼になっていた。家内を呼び一緒に昼食。福岡天神に行く予定が疲れて昼寝。夕刻、甘木教会に行く。掃除をし、夜は家内と近くの温泉に久しぶりに行く。色々な物語があった。日）早朝起きて、芝生10束を植えたとき9時。インドネシア語の週報を作ったとき、青年らは来ない。こんなものだ。午後から幼稚園報告で久留米教会へ。終わり菊の苗を植える。11月には花を咲かせる予定。帰り一気に



「秋月記」を読む。筑後川周辺には物語がある。月）雨、植えた芝生、菊の苗には恵。火）「おはよう。運動会、どうだった。」と挨拶から今日が始まった。「3組、青が優勝」、「おめでとう」。「すべて3組が勝って、パーフェクト賞、もらった」……。わずかな時間の出会いだが元気をいただく。水）今日は庭の木を剪定しようと道具をもって行くが思うようにいかず。月曜にあった業者さんの強い整髪の香りが鼻から取れず、耳鼻咽喉科へ。自律神経失調、蓄膿症、過労と言われるが老化つきる。香りが鼻から取れないという伏兵に悩むかとは思わなかった。木）入園説明会第3回目、幼稚園の教育・保育方針を伝えたつもりだが。「岡崎の友の会」での説教を推敲する。コヘルトは深い。未だに鼻に香りが残り頭が痛い。気分転換で木の剪定。冬の準備。金）運動会の準備。教会の方々も手伝いに来てくださる。複雑な園児に寄り添ってくださる。教会と幼稚園が助け合うものになって欲しい。やはり鼻に香りが残り、外に出て木の剪定。保育内容を巡って大議論。叱っているように聞こえるらしいが、分かってもらいたいし、先生方を尊敬しているから声が大きくなる。帰宅10時を越す。



